

シンポジウム 「武術と舞踊の接点」

目代 清

そもそも「舞踊」の起源を「戦闘」に求める説もあるくらいに、「舞踊」と「武術」とは密接にして深い関係が認められる。と言うことは、舞踊専門の学者者にとって、当該主題は極めて関心深くもあり、また一方で、今更の観を抱かせもするだろう。が、いずれの場合にしても、かなり舞踊の本質に迫る何等かの収穫を、いささかでも望むなら、問題に対応する視点の置き方次第で、各人とも過去に思いも寄らなかった新発見が得られないとも限らないだろう。

そこで当シンポジウムにおける「武術と舞踊の接点」とした主題の表記事情に関して、まず説明して置きたい。

私は「武術」と「舞踊」の二語の広狭義と、動作表現上のこれまた広狭をまず整理しその何れかを限定して採択すべきかどうかで迷った。それ次第では問題が拡散し紛糾する危険性を恐れ得るものと事前に予測したからである。が、「シンポジウム」と言う場の性格に照らし、視聴者が如何様にも自由に条件を付して考察可能な余地を残した方が妥当性が高く、そうすることで多面的に、かつ視聴者の関心も膨らむものと判断した。そこで単的に「武術と舞踊の接点」とのみ表記し、それ以上に条件を付けなかったのである。

さて、改めて述べる迄もなく、当シンポジウムにおける私の立場はパネリストでなく、あくまでも座長である。即ちパネリスト諸氏の当該主題に基づくそれぞれの考察や各専門分野におけるパフォーマンスの表現の特徴の「繋ぎ」または「紹介」の役に主な使命がある。よって、自己の考えを混入した纏め方を表面に打ち出すことは控えるべきと心得てはいるが、当初予定のプログラムの所要時間が大幅に短縮された事情があって、当シンポジウムの主題採用の理由・意図・運び等の手続きを割愛して開始した。しかし、すぐに予定されていたパネリスト三人の考察・意見を順に発表させて頂くだけで、予定時間の大半を消化する羽目となり、意見を交換し検討する等の時間的余裕など全くないまま終了を迎える始末であった。それでも最後には若干強引な気もしたが各パネリスト発表の意図の特徴を、自分なりに筋立てて締め括り、視聴者の参考の要に供したつもりである。

さてそこで最初に発表された上原輝男氏（玉川大学・舞踊学会員）の内容の特徴を捕らえて簡潔に言えば、当学会が開催される数日前に国立劇場

で公演された「武術と舞踊」に関する意見書とも言うべきレジメにも窺える通り、御自身の武道修行の体験とその歴史的研究からの深い造詣を基礎に、日本の民俗芸能として伝承の武術に認められる特徴を主体とするものであったと言えよう。

次に中国中央京劇々団員であり、また北京の中央戯曲学院の教員でもある田震氏の発表は、このシンポジウムの前に行われた、中国武術の歴史的研究に基づく講演と、同時に行われた実演による武術と舞踊の表現差に集約されていた。日本語に若干の難が認められたが、実技面での双方の差異の指摘は言語を超えて説得力があり、客席学会員を圧倒した観があった。

要するに武術舞踊と正真武術の相違は、私が感知し得て注目すべき点では「目使い・化粧動作・足構え」の三点、共通点では「間・呼吸・構え・拍子」等があった。これらの点では日本武術と共通する部分があることを上原氏からの指摘もあった。

しかし、言う迄もないが舞台舞踊の作品としての武術表現は、すでに振付がなされ、終始の動作が決定しているものの再現であるのに対して、正真の武術は当面する敵の打倒を目的とした基本動作の習練がなされていても、実戦の場においては臨機応変に基本動作を応用する点において大きく異なる。それを承知ながらも改めて痛感させられたのは、一人私ばかりでなく客席内の全会員に共通した想いであったように思う。

さてまた、日本舞踊家元藤岡幸三朗氏は武術の戦闘場面を舞踊化した『物語』を、作品『吉野山』の忠信の例をひいて、敵も味方も一貫して一人で表現する「仕方表現」の技法を、舞台上で説明を加えながら披露された。時間の余裕があれば、さらに同じ技法に基づく『御注進』『しゃべり』にまで及んだ考察と技の披露も予定されていた。が、この部分は割愛するに忍び難かったものの、これを以て中途ながら終了させて頂いた。

しかしながら、歌舞伎舞踊の「仕方表現」の内の『物語』は中世舞台の「仕舞・小舞」の流れを汲むもので、歌舞伎の江戸地における舞台舞踊の独自の格闘を題材とする表現としては、割愛せざるを得なかった『御注進』『しゃべり』に真髄が認められるであろう。何故なら、歌舞伎の「立廻り」「所作殺陣」と「武術」との接点の考察も興味深い問題であるが、どこまで「武術」を「舞踊化」し得た歌舞伎舞踊であるかを知るには、この『御注進』『しゃべり』の構想・構成を理解するにしくはないと考えるからである。

以上を以て、当該シンポジウムの抄録とするが、「武術と舞踊の接点」に関する検討は、一見簡単なようで如何にも困難な大課題で、「武術とスポーツ」の問題とも絡んで、さらに連続的に研究会が持たれて一層の追求が望まれるであろう。